

アグレッサー
～侵略者～

M i o & H i d e t o

篠原 怜

Rei Shinobara

termity



エタニティ文庫

目次

アグレッサー ～侵略者～ 5

愛していたい 307

アグレッサー
～侵略者～

プロローグ

彼は長身で、エレガントな黒のタキシードがよく似合っていた。ゆつくりと部屋の中へと進む美緒を、その力強い輝きを放つ瞳でじっと見つめる。

ここは元麻布の陰山邸。豪華な絨毯が敷かれた客間には、アンティークのシャンデリアとマントルピース。中央には英国製のクラシックなソファが置かれている。まるでホテルのスイートルームのようなこの客間で、彼は堂々と優雅に佇んでいた。

これから陰山邸では長男、彰文の結婚を祝うパーティが執り行われることになっている。彰文とその妹、千秋は美緒の幼馴染みだ。

「はじめまして、神崎秀人です」

彼が口を開き、美緒ははっとなる。秀人は優雅に腰を折り、美緒に向かってお辞儀した。その上品な仕草に美緒はうっかり、ため息をもらしそうになる。

神崎秀人。涼しげな目をした正統派のハンサム。彼の神々しいまでの微笑みを前にして、悔しいけれど文句のつけどころがないほど素敵な男性だと、認めざるをえなかった。

二月の終わり、春がすぐそこまで訪れていたある晩のこと。美緒は陰山家のパーティーで、生涯、忘れられない出会いをすることとなる。

1

十三年前。東京。

「さあ、美緒。お父さんにお別れを言わなくちゃ……」

目を赤く潤ませてはいたが、母の幸枝の声は毅然としていた。おとといは病院で、冷たくなった父の身体にしがみつき、狂ったように泣いていた。それなのにどうして今は、こんなに落ち着いていられるのだろう。

母に促され、中島美緒はぼんやりと、祭壇に置かれた父の棺を眺めた。ホールの中には説経が流れ、多くの参列者が父のために涙してくれている。

クリスマスが近づいたある日。都心の斎場では美緒の父、剛の葬儀がしめやかに行われていた。

建築家だった父の剛は、著名な建築設計事務所に籍を置き、都市空間やビルの設計の仕事に携わっていた。授業参観で剛を見た小学校時代のクラスメートが、背が高くくて

クタイの似合う、カッコいいお父さんだとほめてくれたことがある。やや眉が濃く、頑固そうな印象を人に与えるが、根は真面目で働き者の男だと近所では言われていた。たおやかな妻と可愛い娘に囲まれ、順風満帆な人生を歩んでいる、周囲にはそんなふう

に映っていたらしい。

けれど美緒にとって、父は少し遠い存在だった。剛は筋金入りの仕事人間で、あまり家庭を顧みなかった。毎日遅い時間に帰宅し、休みの日でも現場に向かうことが多かった。友達の家のように、日曜日に家族で外出したり、運動会やピアノの発表会に、父がビデオカメラを持参して駆け付けることも、滅多になかった。

本当はもっと構ってほしかったのだが、常に忙しそうにしている父に、我がままを言うてはいけないと感じていた。もしかしたら、駄々をこねても何も変わらないのだと、子供心に悟っていたのかもしれない。

中学生になると、美緒は父に何かを期待することはやめてしまった。愛されていないし、自分も父を愛していないと思うことにした。

そして美緒が中学三年生になった今年、クリスマスを目前にした寒い日の夕暮れ時。

珍しく早く仕事を切り上げた剛は、車で知人宅に向かう途中で事故を起こした。すぐに病院に搬送されたが、美緒が幸枝と駆け付けた時には意識がなく、そのまま帰らぬ人

となった。

幸枝は剛の身体にすがりつき、半狂乱で泣きわめいた。けれど美緒は泣くことはおろか、身動きひとつできなかつた。あまりにも急な父の死に、ショックで声すら出なくなる。「お二人の名前を、ずっと呼んでいらつしやいました」

事故の現場に居合わせ、救急車を呼んでくれた室井という男が進み出る。父と同じぐらいの年齢だろうか。彼の着ている白いワイシャツとネクタイは、血で赤く汚れていた。それを見て、美緒は気分が悪くなったほどだった。

あとで聞いたのだが、室井は危険を顧みず、横転した車の中から剛を救い出し、救急車が来るまで必死で呼びかけてくれたという。その室井の姿が目の前をよぎり、美緒は現実に戻された。律儀なことに室井は、剛の葬儀に顔を出してくれたのだ。

「さあ、美緒」

「おかあさん……」

しっかりとしなさいとばかりに、母は美緒の両腕を掴んで軽くゆすった。涙を堪える母の後ろには、陰山俊文と妻の律子が立っていた。

俊文は剛の大学時代の先輩だった。学生時代から親しくしていた二人は、家庭を持つようになつてからも、家族ぐるみの付き合いを続けていたのだ。

俊文が社長を務める陰山ホテルグループは今、千葉の海沿いの街、葉浦にリゾートホ

テルの建設をすすめており、剛の勤務する事務所がその設計を請け負っていた。事故が起きた日、剛は俊文の家に寄ってから帰ると幸枝に連絡していたそうだが、俊文も律子も、剛からは何も聞いていないと言った。

今となつては、何の目的で剛が陰山家に向かつていたか、知るすべはない。

「大丈夫だよ、美緒にはあたしたちがついてるから」

俊文の娘の千秋の声がした。気がつくと自分の両側に千秋と彼女の兄の彰文が座っていた。千秋は美緒より一つ年下で、彰文は二歳上だった。三人は、幼い頃から仲良く遊んだ間柄だ。

「ほんとだよ。ずっと、ずっと一緒だから」

「ちーちゃん……」

千秋は膝に置いた美緒の手を自分の両手で包んでくれた。温かな千秋の手に包まれた瞬間、凍りついていた心が溶けていった。父は死んでしまったのだ。もう二度と帰ってこない。

「何も心配はいらないよ。僕も父さんも絶対に美緒とおばさんを守るから」

「あっくん」

彰文が、少し遠慮がちに肩を抱いてくれた。途端に安堵の思いが胸に広がり、涙がこみ上げてくる。

「我慢しなくていいよ、美緒」

千秋の声も涙でかすれていた。彰文と千秋に支えられ、美緒はようやく立ち上がり、最後の別れを告げるべく、父の棺の前に立つ。

花々に埋もれた父の顔は青白く、触れると頬はひんやりとしていた。もう目を開けてくれないし、美緒の名を呼んでくれることもない。愛してくれていたのか、確かめることもできない。

「お父さん、お父さん……」

溢れる涙のせいで、それ以上言葉にならなかった。

最後に父と交わした言葉が何だったか、今となつては思い出せない。ただ事故の数日前の日曜日、珍しく剛は幸枝と美緒を誘って、車で葉浦市へ向かった。風の強い海岸通りに車を止め、急ピッチで工事が進むホテルの建設現場を指差した。

「もうじきあそこに素敵なホテルができるよ」

剛は笑顔で美緒を振り返った。それまで曇っていた空から薄日が差し込み、剛の笑顔を明るく照らし出す。父はこんなふうに笑う人だったのかと、胸がほっこりと温かくなつた。

あの日三人で見たのが、葉浦マリンホテル。東京と大阪で高級ホテルを経営する陰山ホテルグループが、初めて手がけた郊外型リゾートホテル。

あの時の父の笑顔とマリンホテルにかけた思いが、その後もずっと美緒の胸に残った。あれから十年以上の歳月が過ぎた。

美緒が父と一緒に眺めたホテルは、翌年、無事に開業を迎え、今では葉浦の海辺の象徴と言われるようになっていた。

白い鳥が翼を広げたような白亜の外観は、葉浦の青い空と海によく映えた。オーシャンビュウの客室から眺めるベイエリアの景色は圧巻で、都心の夜景を望める最上階のスカイラウンジは、このエリアの人気デートスポットとして定着していた。

東京から電車で約三十分、房総半島の北西に位置する葉浦市の西部地区は、十数年前から開発が進み、現在ではコンベンションセンターやオフィスビル、シネコンやショッピングモールといった商業施設、そして広大な都市公園や整然と区画整理された住宅街が造られていた。

マリンホテルの歩んだ年月は、そのままこの地区の発展の歴史でもあった。

立春が過ぎて間もない土曜日の昼時、美緒はスプリングコートの裾を翻しながら、マリンホテルのエントランスをくぐった。吹き抜けのロビーの中央に位置する噴水が、春の日差しを浴びてきらきらと輝いている。初めてこのホテルを訪れた時、まるでサンルームのように明るく開放的なロビーと、穏やかな葉浦の海を連想させる噴水のモニュメ

ントに心を奪われた。

とどころに配置された花と緑に心を癒され、優雅な曲線を描いて二階へ続く大階段を見上げるたびに、ドラマが起ころうな予感に胸が躍った。父がこのホテルの設計に携わっていたのが嬉しく、誇りでもあった。

不慮の死を遂げた父の夢は、いつしか自分の大切な希望へとすり替わっていた。高校時代は母を助けてアルバイトに励み、その傍ら勉強にも打ち込んだ。そして五年前、大学を卒業した美緒は、千秋の父、俊文が社長を務める陰山ホテルグループに入社した。

陰山ホテルグループは東京の新宿と日比谷、そして大阪に高級ホテル・シンフォニアを所有し、同じく高級フレンチレストラン『ミストラル』を、国内主要都市に展開していた。そして美緒の父が亡くなった翌年には、葉浦の海沿いと信州の山間部に、リゾートホテルをオープンさせた。

いずれは葉浦マリンホテルのスタッフになりたい――

そう夢見て陰山ホテルグループに入った美緒だが、残念ながら入社以来、ずっと日比谷のシンフォニアでの勤務が続いている。

葉浦の市街地を眺めながら上昇していくシースルーのエレベーターを、最上階の二十五階で降りた。昼時のスカイラウンジはランチビュッフェのせいで混み合っていたが、美緒はすぐに窓際のリザーブ席に案内された。そこにはトレードマークの黒いパン

ツスーツに身を包んだ東条りん子が、既に席についていた。

「お待たせして、ごめんなさい」

「いいのよ。それより来てくれてありがとう、元気そうね」

「うん、おかげさまで。けど今夜は夕方から仕事なの。だからあんまりゆっくりはできなくて」

「わかつてる。かつこい制服用着てるけど、ホテルマンも大変よね。『マシエリ』の美緒が今夜はホテルで夜勤だなんて、誰にも想像つかないだろうね」

『マシエリ』の美緒。

久しぶりにそう呼ばれ、美緒はひどく懐かしい気分になる。アルバイトで始めたモデル業を引退してすでに六年になるが、「元マネージャー」のりん子は度々、当時のことを口にする。

「『マシエリ』の美緒はもう過去の人よ。それに慣れると夜勤もへっちゃらよ」

明るい声で返事をして、美緒はビュツフエを取りに行こうと、りん子を促した。

美緒がりん子に出会ったのは、高校に進学して間もない頃だった。

当時の美緒は父を失った悲しみから立ち直れず、幸枝や千秋に心配をかけていた。一方で幸枝は、美緒とは対照的に行動的な女性へと変わっていった。それまで住んでいた目黒の家を手放し、足立区の綾瀬に小さな家を買って引っ越した。嘆き悲しむ暇さえな

いまま、幸枝は仕事を探し、時間に追われる生活を始める。

美緒はその時、私立中学校に通っており、その付属高校への進学を決めていたが、幸枝は私立をやめて都立高校を受け直さなかいと言い出した。

もちろん承諾した。母子家庭となり、経済的に厳しいのだろうと理解したからだ。そんなある日のこと。

「背が高いわね。モデルやらない？」

学校帰りに立ち寄った新宿の書店で、りん子はこんなふうに声をかけてきた。すでに同じような誘いを幾度か受けたことがあったが、女性のスカウトはりん子が初めてだった。

自分の容姿に自信を持っていたわけではないが、美緒は子供の頃からやせ形で手足の長い少女だった。身長はその時すでに、一七〇センチを超えていた。

「自分に自信がつくわよ。それに人気が出たらギャラも上がるわ。バイトだと思つてやってみない？」

ギャラがもらえる。

そうなれば、経済的に母を助けられるという考えが頭に浮かんだ。何より黒のパンツスーツを颯爽と着こなすりん子の、生き生きと輝く瞳に魅了された。いつまでもめめめそしていては駄目、一緒に新しい一歩を踏み出しましょう……、そう誘いかけてくるよ

うだった。

考えた末にモデルの仕事をやると決心した美緒を、幸枝は認めてくれた。どうせたいした仕事は来ないでしょ……、そう思ったらしい。だが予想は外れ、案外順調に仕事は回ってきた。

一年が過ぎた頃、美緒は当時女子大生のバイブルといわれたファッション雑誌『マシエリ』の専属モデルになり、一躍有名になる。父を失くした悲しみも乗り越え、カメラの前でも自然に笑えるようになっていた。

『マシエリ』の仕事は大学に進学してからも続き、誰もが美緒は、卒業後もモデルとして活躍するだろうと予想した。けれど大学四年の秋を最後に、美緒が『マシエリ』の表紙を飾ることはなかった。

「しつこいようだけど、うちに帰ってくる気はないの？」

美緒は前菜を口に運ぶ手を止めて、ゆっくりと首を横に振った。

モデルを引退し事務所も辞めはしたが、りん子との付き合いは続いていた。たまに会ってお酒を飲んだり食事をしたり。社会人の先輩と後輩というよりも、むしろ姉と妹のような感覚になっている。ただ折に触れてりん子は、「考え直さない？」と、モデル業への復帰を打診してきた。

りん子の気持ちは嬉しいが、その可能性はゼロだった。自分にはまだ、叶えていない

夢があるのだから。

「相変わらず頑固だね。まあ、そこがあんたのいいところなんだけどさ」

諦めたように言い、りん子は食事の続きに取りかかる。この何年かは、こういった会話を繰り返してきた。

すぐそばのコンベンションセンターで今日と明日の二日間、国内の人気アパレルブランドが一堂に会する大きなファッションショーがある。それに事務所のモデルが多数出演するため、昨夜からりん子はモデルたちを引き連れマリンホテルに泊まり込んでいるのだ。

「ランチをおごるから、いらっしやいよ」

数日前にそう誘われて、美緒は久しぶりに葉浦にやってきた。ここが父が最後に手がけた仕事だと知ってから、りん子は時々美緒をこのホテルに誘ってくれる。遠慮のない物言いをする女性だが、面倒見がよく、言い方は古いが、義理人情に厚いタイプだった。食事をしながら、ふと窓の外に目を向ける。

正午を回ったばかりの空は青く晴れ渡り、眼下には芝生の広場やプロ野球チームの本拠地球場、そしてのどかな東京湾が広がっていた。

「ところで陰山家とはその後どう？」

「どうって、何も変わらないけど？　うちはうち、向こうは向こう」

「陰山夫人にいじめられてたりしない？」
 「りん子さんったら……。何度も言ってるけど、気のせいよ。おば様はプライドの高い人だけど、弱い者いじめはしないわ」

以前から、りん子は陰山律子が気になると言っていた。二、三度顔を合わせただけに、あれは品の良い仮面を被った、危険な女だと言った。まるで夫の愛人を見るような目で、あんたを見ている、うかつに近寄らないほうがいいと。

「何も起きてないなら、いいのよ。まあ、向こうもあんたを自分の亭主の会社に入れたってことは、そこまで嫌ってはいないんだろうけど。でもあの女、絶対あんたのこと良く思っていないわ。陰山グループの一員にはなつたけど、仕事とオフは切り離すのよ。そして陰山夫人とは距離を取りなさい。いいわね」

「わかりました」

素直に返事をしたものの、そうもいかないのだということも思い出す。

「でも来週、パーティに呼ばれてるんだった」

「パーティ。陰山家の？」

「そう。どうやら彰文さんが、結婚したらしいの。式はまだなんだけど、もう入籍は済ませたそうよ。そのお披露目パーティを自宅ですから是非来てほしいって、おじ様から電話があつたわ」

「まだ、そんな付き合いが続いてんだ」

「おじ様は優しい人だから。父が生きてた頃のような付き合いはしていないけど、折に触れて気にかけてくれるの」

父が死んで十年以上が過ぎていく。

千秋とは今でも親友同士だし、千秋の父、俊文も、剛の命日には墓参りを欠かさないでくれている。けれど互いの家にはかつてのような親交はなくなっていた。だから今回のような祝いの席に母娘で呼ばれるようなことは、もうないと思っていたのだが。

「きつと、それが気に入らないのね。陰山夫人は」

えつと、美緒は顔を上げる。

「美しい未亡人と、人気モデルだった美人の娘。女って嫉妬深いから。自分の亭主が変な気を起こさないか、心配でしょうがないのよ」

美緒はりん子の妄想を否定しようと、精一杯明るい声で言った。

「ドラマの見すぎよ、りん子さん。大丈夫、わたしも母も身のほどはわきまえてるから。せっかく入った陰山グループを首になりたくないもの。誤解を招くようなことは絶対にしないわ」

ごまかしはしたが、りん子の勘の良さにはいつもながら驚かされる。

だいぶ前から美緒は、自分に対する律子の言動に冷ややかなものを感じていた。父

の死後は、それが顕著に現れた。何故律子が態度をあからさまにしたのか、今でも理由はわからない。知ろうとも思わなかった。二つの家族は疎遠になりつつあったし、千秋と親友でいられさえすれば、美緒は十分だったので。

もう、よそう。

自らに言っただけで聞かせ、美緒は窓の外に目を向ける。手を伸ばせば届きそうな青空を見ていると、気分が晴れやかになってくる。そして背後のデザートコーナーにはたった今、美味しそうなケーキが補充され、美緒のテンションをさらに上げてくれた。楽しまなくては。

不幸なことに、開業十周年を過ぎたマリソホテルの売り上げは、下降線をたどる一方だと聞く。だが、今日の館内の賑わいを見る限りそんな裏事情は想像できなかった。

「ねえ、シンフォニアみたいな高級ホテルで働いてると、VIPとお近づきになったりしないの？」

ケーキを取りに行こうとした瞬間、りん子に尋ねられる。

「顔見知りの常連は多いけど、特別なコネは持ってないわ」

「でも、結構なセレブも来るでしょ、あそこなら。それに来週は陰山家のパーティもあるじゃない。玉の輿に乗れそうな、ハイグレードな男を見つけて誘惑しなさいよ」

「何言ってるの」

美緒は鼻であしらったが、りん子の顔には未来を見据えるような、自信ありげな表情が浮かんでいた。

「いいえ。きつとあんたは、どこかの御曹司を捕まえて玉の輿に乗るよ。そんな気がするわ」

また、夢みたいなこと言ってる。

現実主義者のりん子だが、たまに突飛なことを言うことがあった。

笑いながらも美緒は、深い感慨に包まれた。あの優しい兄のようだった彰文が結婚するとは。たぶんパーティには、各界の有力者が集うことだろう。まさにりん子の想像するような、名家の子息が来ないとも限らない。野暮ったい格好で訪問して、律子のひんしゆくを買っては大変だと、今から緊張感に襲われた。

2

慌ただしく一週間が過ぎ、翌週日曜日の夕方、美緒はこの日のために新調したイブニングドレスに身を包んで、元麻布にある陰山邸を訪れていた。

広い玄関ホールに立ち、優美な手すりのついた木製の階段を見上げていると、子供の

頃を思い出す。あの頃はこの階段を、千秋と手をつないで駆け上がったものだ。調子に乗った彰文が、手すりにまたがり階下へ滑り下りたこともあった。

最後にここに来たのはいつだったろうか。父の葬儀の後に一度と、引越しの後にも一度。

大人の思惑など知りもしなかった子供の頃が、ひどくなつかしく感じられる。

思い起こせば小学校四年生になった時、彰文の名前の呼び方について律子に注意を受けたことがあった。あなたも十代の仲間入りをしたのだから、「あつくん」という呼び名はやめて、彰文さんと呼ぶほうがいいわ……、律子はそう提案してきた。

さらに美緒が高校に入学すると、律子は自宅に美緒を呼びつけ、今後彰文とは二人っきりで会わないよう命じた。

「千秋と会うのは構いませんよ、でも彰文と二人だけで会うのは許しませんから」

「どうしてですか？」

「彰文は陰山グループを背負って立つ人間です。お付き合いする相手も相応の方でないといけません。万が一あなたのような人と間違っても起こされたら……」

蔑むような律子の視線が、今でも忘れられない。

その時美緒は、律子が自分を一人の女として見ていることを知った。律子の中で自分は、夫の友人の娘とか、娘の幼馴染みだとかいう部類からはずされてしまったようだ。父の

剛が死んだので、もはや遠慮する必要がないと思われたのだろう。

美緒にとつて、彰文は優しい兄以上の何ものでもなかった。彰文も彼女を、もう一人の妹としてしか見ていない。間違いが起こるなどと、勘ぐられること自体悲しかった。

それでも美緒は約束した。彰文と二人だけで会わないと。

その頃美緒の心には、陰山ホテルグループに就職し、葉浦にあるマリンホテルのスタッフになりたいという夢が芽生え始めていた。ここで律子の機嫌を損ねたら、夢への道が閉ざされるかもしれない。

我慢よ、我慢。

あの時は悔しさを堪えて、素直に律子の申し出を聞き入れたのだ。そんな経緯があるからこそ、このパーティに招かれたのは意外だった。律子は、美緒と彰文が同じ空気を吸うだけで耐えられないだろうと思っていた。

「客間のほうにどうぞ、美緒様。すぐに奥様がいらっしゃいますので」

「わかりました」

出迎えてくれた家政婦にコートを預け、彼女の案内で廊下を進む。パーティが始まるまでまだ一時間もあるからか、大広間を色々な服装の人が出たり入ったりしている。きつと準備で忙しいのだ。母の幸枝もその中にいるかもしれない。

幸枝は今、上野の生花店に勤める傍ら、フラワーコーディネーターとしてカルチャー

スクールの講師もしていた。小さな花束から、披露宴会場のテーブルを飾る花のアレンジまで様々な仕事をこなしている。

その母に、陰山夫妻はパーティの花の手配と飾りつけを依頼してきた。母は快く引き受けて、今日は美緒より早く家を出ている。今頃は生花店のスタッフにあれこれ指示しながら、準備に当たっているはずだった。

今日の招待にすっきりしない部分はあるが、割り切ってパーティを楽しまなくてはと思う。何しろドレスを新調したし。

襟ぐりが広く開いたラウンドネックのドレスはノースリーブで、身体にびったりとフィットするデザインだ。イレギュラーにカットされた裾が歩くたびにひらひらと揺れて、足が見え隠れする。モデルをやめてから二キロも体重が増えてしまったが、黒のドレスは身体をほっそりと、セクシーに見せてくれた。

髪はふんわりとアップにし、顔の周りを縁どるようにカールした髪を散らした。首には社会人になって最初のボーンラスで買った、ダイヤのチョーカーをつけた。胸元と裾にあしらわれた銀色のスパンコールとマツチして、十分ゴージャスに見えるはずだ。

「美緒」

ふと後ろから自分の名を呼ぶ声が出て振り返ると、階段の手すりから身を乗り出すようにして、千秋が手招きしていた。

「こっちへ来て、早く」

千秋はまだ着替えていないようだった。どこか慌てた千秋の様子が気になって、美緒は客間には後で行くと家政婦に告げ、一人で廊下を引き返した。

「着替えがまだなのね。手伝おうか？」

その問いには答えず、千秋は美緒の腕を取り階段を駆け上がると、二階の自室に招き入れた。

暖かな室内は、花柄の壁紙とカーテンに囲まれていて、ベッドの上にはサーモンピンクのドレスが、ドレッサーの上には大きなベルベットのケースに入ったパールのネックレスが、無造作に置かれたままになっていた。

千秋が美緒を窓辺に連れていく。

「大変なのよ、ママったらね……」

言いかけて、彼女は用心深く背後を振り返る。ドアが閉まっていることを確認してから、美緒をソファに座らせて、自分もその隣に腰を下ろした。

「またお見合いの相手連れてきちゃったの」

「あら」

美緒は吹き出した。こんな会話を今までに何度繰り返したことだろう。

千秋が十六歳になって間もなく、律子は娘に最初の縁談を持つてきた。確か相手は

二十代後半の、経済界の大物の孫だった。千秋が大学を卒業すると同時に結婚させたかったようだが、本人の猛烈な抵抗にあって白紙になった。

それ以後も、律子は定期的に縁談を持つてきた。相手は常に、裕福で家柄や経歴に申し分のない男たち。たいていは千秋よりかなり年上で、中にはいい年をして母親に頭が上がない者もいた。

仕方なしに一度は会ってみるのだが、千秋は相手の人柄にいつもがっかりさせられているようだった。皆、自分とそ一族の自慢ばかり。千秋が望む、気さくでユーモアに溢れた会話を楽しめるような男性には出会えていない。

「仕方ないわよ。千秋はお嬢様なんだから」

「でもお嬢様にだって選ぶ権利はあるわ。ママが見つけてくる男性って、どうしてあんな極端というか、わたしの理解を超える人たちばかりなの？」

千秋はため息をつきながら、ベッドの上のドレスを眺めていたが、ふいに美緒を振り返った。

「笑ってる場合じゃないわ。ママったらね、美緒の相手も連れてきたわよ」

「わたしの相手？」

「そう。ドレスアップした男性が二人、客間に到着しているわ。あなたを早く呼んだのは、どちらかの男性に会わせるためよ」

「ちよつと、それってどういうこと……」

「どういふことも何も、お見合いいよ。それともブラインドデートって言うてほしい？」

さつき笑ったお返しとばかりに、千秋がにっこりと笑ってみせた。その時ドアをノックする音がして、美緒は口まで出かかった文句を呑み込んだ。

「千秋さん、まだ着替えてないの？ お客様がお待ちなのよ。早くなさい」

律子が部屋に入ってくる。リボんタイのついた赤いシャネルスーツを着て、美緒のチヨーカーがおもちゃに見えるぐらい大きなダイヤの指輪をはめている。その視線はすぐに美緒にも向けられた。

「ドレスがよくお似合いいね、美緒さん。おめかししてきてくださって嬉しいわ」

「こんにちは、おば様。今日はお招待していただき、ありがとうございます」

美緒は立ち上がって律子に挨拶した。知的な印象を与える律子の目が、値踏みするよう自分を見ている。その目に見つめられると、蛇に睨まれた蛙かえるのように動けなくなってしまうそうだった。

「ママ、着替えたら行くから、もう少し待ってて」

「ええ、早くしてちょうだい。他のお客様が来る前にご紹介しておかないと。美緒さん、あなたも一緒に下にいらしてね。素敵な男性がお待ちかねよ」

「おば様、何のことですか」

「あなたに紹介したい男性がいるの。とっても素敵な方だから、気に入ってもらえと思うわ」

当惑する美緒の前で、ほほほ……と、律子は気取って笑った。

二十分後、美緒は急いで着替えを済ませた千秋と一緒に階下へおりた。

あなたに紹介したい男性がいるですって？

何の権利があつて、律子はそんな余計な世話を焼くのか。千秋の相手を探すだけでは物足りないのだろうか。

素敵な男性？

過去に律子が千秋のために見つけてきた男たちを思い浮かべる。年収と地位は高いが、恐ろしく保守的な考えの持ち主で、美しい飾りとなる妻を求める男ばかりだった。

結婚するなら、年が離れた相手でも構わないと美緒は思っていた。価値観が同じなら相手を理解し、尊敬もできるだろう。だが律子の選んだ男性ということは、律子と同じ価値観の持ち主ではないのか？

何をやっても相容れない自分と律子の関係を思えば、これから紹介される人物が、自分と同じ価値観を持ち、同じものを見て笑ってくれる可能性は低いような気がした。

いや、そんなことはもうどうでもいい。

問題なのは、何故律子が自分に男性を紹介しようとするのか。そっちのほうだ。

客間のドア越しに、律子の高笑いが廊下にまで響いていた。美緒の顔をちらりと見た千秋が、申し訳なさそうな顔になる。そのまま彼女がドアをノックすると、笑い声がびたりとやんだ。

「千秋です」

中から家政婦がドアを開け、千秋が先に部屋に入る。美緒もその後が続いた。奥のソファから待ちかねたように律子が立ち上がり、こちらへ来いとばかりに手招きをした。いや、律子だけではない。その向かいのソファから、タキシードに身を固めた二人の男性も立ち上がった。

手前にいるのが三十代の前半くらいに見える男性で、その向こうにいるのが、美緒と同じくらいの年齢と思しき、すらりと背の高い男性だった。

彼は長身で、エレガントな黒のタキシードがよく似合っていた。紹介されるまでもなく、律子が美緒のために呼んだのが彼だとびんときた。

何故なら彼の力強い輝きを放つ瞳が、真っ直ぐ美緒に向けられていたから。

「ご紹介するわ、こちらが脇田蓮さん。帝都銀行にお勤めですよ」

千秋と並んで男たちの前に立つと、年長のほうの男性を、律子がそう紹介した。

帝都銀行。国内最大級のメガバンク。

なるほど、有能で堅実な銀行マンであれば、いかにも律子が千秋の見合い相手に選びそうだと。けれど、どれほど律子が脇田を褒めそやしていても、美緒はほとんど聞き流していた。隣で千秋が男たちにお辞儀をしたのも、気配で感じ取っただけだ。

今は何も頭に入りそうもない。目の前の彼と目が合った瞬間、金縛りにあつたように動けなくなっていたから。

目をそらしたら負けだと思つた。

先に目をそらしてしまつたら、この先彼に主導権を握られてしまふ、そんな気がした。だから不躰なほどじっと見つめてくる相手に、臆することなく自分も視線を投げ返していた。だがそれも、限界が近づいてくる。心臓が高鳴り始め、喉がカラカラに渴いてきた。そこまで追い込まれてから、美緒はこんな勝負、さつさと手を引くべきだったと後悔した。彼は正統派の美形という表現がぴつたりの、惚れ惚れするようなハンサムだ。

わずかに襟足にかかると、やや明るい色の髪。緩やかなカーブを描く細めの眉と、クールな輝きを放つ二つの瞳。その形の良い唇をほんの少し持ち上げて微笑むだけで、この世の女という女をすべていいなりにできそうな、罪作りな顔だ。

そしてただ立っているだけなのに、育ちの良さをうかがわせる、上品な雰囲気は漂わせていた。こんなハンサムな男性に間近で見つめられたら、よほど鈍い女でない限り、平然としてなどいられないだろう。

「美緒さん」

「はい！」

声をかけられ、美緒はうっかり律子のほうを向いてしまった。そのせいで、彼の口元に勝ち誇つたような笑みが浮かんだことには気づかなかつた。律子が抜け目のない笑みを浮かべる。

「その方が神崎秀人さんです。お父様は神崎スポーツの社長をなさつてゐるわ」

律子が彼をそう紹介した。

「はじめまして、神崎秀人です」

彼が口を開き、美緒ははっとなる。低いがよく通る、艶のある声だった。その声で美緒はまたも彼の視線に捕まった。

(どこを見てる、俺のほうを見ろよ)

優雅に微笑んでいるが、まるでそう言いたげな尊大な視線だ。きつとこういうタイプの男は、自分が女に与える強烈な印象を十分理解していて、それを最大限に生かすのだ。なんて嫌なヤツ。

ようやくこの場の空気になれてきたからか、美緒は心の中で小さく毒づいた。けれど神崎秀人は優雅に腰を折り、美緒に向かってお辞儀をした。上品で洗練された彼の立ち居振る舞いに、ため息がもれそうになる。

「彼女が中島美緒さんです。さつきもお話ししましたが、主人と美緒さんの亡くなったお父様が懇意にされていて、小さい頃から娘の千秋と仲良くしていただいておりますよ」

「中島美緒です……。はじめまして」

律子の紹介を受け、美緒は緊張しながらも、失礼のないように男たちに向かってお辞儀をした。

「秀人さんは、お父様のお仕事を手伝っていらっしやるそうです。神崎スポーツはご存じよね？」

「ええ……。もちろん」

日本が世界に誇るスポーツブランド、いや、総合スポーツメーカーだ。美緒の返事に、律子は満足そうに頷いた。

「スポーツメーカーだけあって、秀人さんご自身も大変なスポーツマンで、特に学生時代にはテニスの大会で、いくつも優秀な成績を収めていらっしやるそうよ」

そうでしたわね……。と律子が秀人に同意を求める。秀人は美緒から視線をそらさないまま、

「いえ、それほどでも」

と、心にもないような謙遜けんそんの言葉を口にした。

その時になってようやく美緒は、律子の隣に母の幸枝がいることに気づいた。何故今まで気づかなかったのか。たぶん母が、家を出たままの服装だったからだ。

幸枝は花の飾りつけが済んだら着替えるからと、フォーマルなワンピースを持って午前中に家を出ていた。真つ赤なシャネルスーツを着た律子の隣で、シックなこげ茶のセーターにグレーのストラックスという母の姿が、やけに寂しげに美緒の目に映る。

「まあ、おかけになって、皆様」

美緒の気持ちなど知ったことかと言わんばかりに、律子の声は嬉々としていた。

脇田を見た時の千秋の反応がまんざらでもなかったのと、美緒を見つめる秀人の熱い視線から、彼が美緒を気に入ったのだと確信したのでろう。

「脇田さんには、陰山ホテルグループとしても大変お世話になっているのよ。お若いのに経済の動向をよくご存知だって、お父様はそれは高く評価していらっしやるわ」

「そうですか……」

千秋は当たり障りなく相槌あいづちを打った。彼女は躰しつぱいの行き届いた女性だから、こういう場で親の顔を潰すような振る舞いは決してしない。

「今後は秀人さんも、お仕事を通じて陰山グループとお付き合いしていただくことになります……。あら、これはまだオフレコだったかしら……」

失言に気づいた律子は、得意の上品な笑い声でごまかした。

神崎スポーツと陰山ホテルグループが繋がる？

そういうえば葉浦と信州にある、陰山ホテルグループ直営の二つのリゾートホテルが、業績不振のために売却されるのでは……？ という、美緒にとってはぞつとするような噂を耳にしたことがある。

グループ全体の売り上げは決して悪いものではないため、いきなり二つのリゾートホテルを切り捨てることはないと思われるが、経営を好転させるために大きなテコ入れは必要だろうと、シンフォニアのホテルマンたちは囁いていた。それが神崎スポーツとの提携であれば、悪い話ではないと思う。

神崎スポーツは「KANZAKI」のブランドで世界中にその名を知られた、老舗しにせのスポーツメーカーだ。国内での知名度も影響力も抜群だと思われる。

「脇田さんが是非にとおっしゃって秀人さんをお連れになったの。美緒さん、今日はあなたが秀人さんのお相手をしてあげてちょうだいね」

「はい……、え？」

「あなたなら話が合いそうだからと思って呼んだのよ。今日は秀人さんにエスコートしていただいて、楽しんでちょうだいね。くれぐれも大事なお客様だということを、お忘れにならないで」

顔は笑っていても、律子の目は笑っていなかった。

これは千秋が言っていたような見合いもどきではない。接待なのだと、律子からの無言の圧力を受けて美緒は気づいた。つまり美緒は、お金持ちのパパを持つ御曹司の機嫌をとるために、今日のパーティに呼ばれたのだ。しかも相手は、自分の会社の大事な取引先だ。下手に機嫌を損ねたら会社の損失にもつながりかねないし、社長夫人の律子に後で何と言われることか。

「じゃあ、パーティが始まるまであと少しお時間がありますから、それまでごゆっくりお話しになってね。幸枝さん、私たちは着替えに行きましょう」

「ええ」

律子の言葉に頷いて、幸枝も立ち上がった。そしてちらりと美緒のほうを見ただけで、客間から出ていこうとする。

「お母さん……！」

美緒は男たちに中座する詫びを入れ、母のあとを追った。

「ねえ、何なのこれ？」

廊下に出たところで母を捕まえ、ドアの向こうに聞こえぬよう、声をひそめて尋ねる。

「何って、何が？」

「とほげないで。どうしてわたしがあの人の相手をしなきゃならないの？」

「あら、素敵な人じゃない。何か不満があるの？ 美緒のことじつと見てたし、気に入

られたんじゃない？」

「だって、いきなり紹介されて、あんなふうに言われて……。わたしはどうしたらいいの？」

戸惑いを隠せない美緒に、幸枝は少し冷めたような口調で言った。

「今日だけは、失礼のないようにお相手してあげなさい。それでもし、あなたたちが意気投合したら、その後は好きにしたらいいわ。お母さんは口出ししない。それにあの、嫌な人じゃないわよ、きつと。とても礼儀正しいし……」

幸枝は言葉を切って、小さくため息をついた。

「こんなこともあるって覚悟してたんでしょ？ その上で美緒は陰山グループに入った。違う？」

（これ以上、陰山家とは関わらないほうが良かったのに、あなたは自分から飛び込んだのよ。律子が何か画策しようが、自分で対処するしかないでしょう）

母の表情から、美緒はそんなメッセージを受け取っていた。大学卒業後は陰山ホテルグループに入りたいと言いつつ続けた美緒に、母が最後まで反対していたことを思い出す。

「幸枝さま、お急ぎください」

家政婦が幸枝を呼びにきた。急がなくては。母の着替える時間がなくなってしまう。

「わかったわ」

美緒は頷いて、母の腕に軽く触れてから、ドレスの裾を翻して客間へと戻った。今日のところは律子の命令に従うしかない。何しろ今日は、彰文の結婚披露パーティなのだ。千秋がそうであるように、彰文も大切な幼馴染みだ。精一杯、祝ってあげなくては。

神崎秀人はスラックスのポケットに手を差し込んで窓際に立ち、端正な横顔をこちらに向けていた。

スポーツマンだと言ったが、どちらかという細身で、広い肩からウエストにかけて上半身が見事な逆三角形になっている。腰の位置は高く、足が長い。

美緒に気づいた彼がこつちを向く。形のいい唇の端がふわっと持ち上がり、美緒の心臓が条件反射のようにとくんと高鳴った。

「話はお済みですか？」

「ええ……」

「日比谷のホテルにお勤めだそうですね。どんなお仕事なさっているのですか？」

「今は、ベルガールをしています」

まるで引き寄せられるように、美緒はゆっくりと彼のそばへ歩み寄る。

こういう男は好きじゃない。心の中のもう一人の自分が叫ぶ。お金持ちのパパに守られて、何の苦労もしないで大きくなったような男は好きになれない。

だけど、見つめられて頬が熱くなるようなこの感覚は何だろう。ソファで向かい合う

千秋と脇田の会話が途絶え、自分たちを見ていることも気にならなかった。

「へえ、美緒さんならベルの制服がよく似合いそうだ。でも……」

秀人の声のトーンが変わり、その目に今までと違う光が宿る。

「雑誌の表紙を飾っていた頃より少し太ったかな。まあ、今ぐらいのほうが健康的でいいと俺は思うけど」

「なっ……」

モデルをしていた頃の彼女を知っているのだ。

まるで美緒の反応を楽しむかのように、秀人はどこか尊大に、けれど優雅に微笑んだ。

その日陰山家に招かれた招待客の数は、美緒の予想をやや下回っていた。

東京と大阪に三つの高級ホテルを抱え、高級フレンチレストラン『ミストラル』を全国展開する陰山ホテルグループのパーティなのだ。政財界の大物の姿がもつと目についても良さそうなものなのに、この場にいるのは、陰山夫妻のごく親しい知り合いや、彰文の友人がほとんどだ。

何しろ急な招待だった。無理もないことなのかもしれない。

パーティが始まるや、俊文の挨拶があり、息子夫婦の紹介が行われた。彰文は今年三十歳、新婦の多香子は彼より一つ年上の三十一歳になるといふ。都内の保険会社で〇

しをしていたと紹介された多香子は、色白でしつかり者という印象を出席者たちに与えていた。

二人はすでに入籍を済ませ、新居となる白金台のマンションで新婚生活を始めているとのこと。

本来ならば、結婚式や披露宴を執り行うべきなのだが、多香子の祖父が昨年末に他界したため、祝い事は一周忌が明けてから行うつもりだと言った。

では、なぜ急いで入籍する必要があったのか。その場にいた全員が同じ疑問を持ったようだった。多香子が妊娠しているようにには見えない。

「とても素敵なお嬢様ですもの。一刻も早く息子の嫁にちょうだいしたかったですの」
集まった人々に聞こえるように、さきほどから何度となく律子がそう口にしていた。

白いドレスに身を包んだ多香子は、幸せそうだった。彼女の周りだけ一足先に春が訪れたみたいだ。二人が幸せなら、周りごとやかく詮索する必要もないだろうと美緒は思った。

内輪だけとはいえ、そこは陰山家だ。パーティは華やかに進行している。

ピカピカに磨き上げられた大理石の床、天井から吊るされた超ゴージャスなガラスのシャンデリア。家具や調度品はフランスやイタリアから取り寄せた高級品ばかり。

この大広間にいると、まるでヨーロッパの貴族の屋敷に迷い込んだような錯覚おちいに陥る。

でも今の美緒は貴族の屋敷より、秀人の背中のように興味があった。

「いったい、彼は何を考えているのやら。」

少し離れた場所まで、着飾ったご婦人たちに捕まっている秀人の背に、恨みがましい視線を送り続ける。彼は今、美緒のためにシャンパンのお代わりを取りに行ってくれていた。「少し太ったかな」

パーティーが始まってもお、さつき秀人に言われた言葉がエンドレスで脳内に再生されていた。

人が一番気にしていることを、よくもずけずけと。見つめる視線に呪いを込めてやりたいほどだ。

「姉があなたのファンでしたから」

二歳上の秀人の姉が『マシエリ』の愛読者だったから、モデル時代の自分を知っていると彼は言った。ファッションモデルなんてたいしては、棒切れのようにひよろ長くてガリガリの体形をしている。仕事をやめて一般人に戻った途端体重が増えるのは、ある意味宿命のようなものだ。

多少太ったといっても美緒の場合、世の女を細いか太いかのいずれかに分類したら、十分前者のカテゴリに入る。その体形で太っていると嘆いたりしたら、自分をはじめとしたその他大勢の女たちはどうしたらいいのよと、何度も千秋に呆れられていた。

パーティーが始まってから、秀人は片時も美緒のそばを離れようとしなかった。美緒が歩くとボディガードのようについてくる。まるで彼女に近づこうとする男性客をさりげなく牽制しているみたいだ。まあ、これは自惚れかもしれないが。

見ていると次から次へと、招待客が彼に挨拶をしにきた。そのたびに彼は、年上の紳士やマダムと会話を楽しんでた。

「みんな親父の知り合いですよ」

そんなふうの説明してくれた彼だが、これだけ顔見知りが多いなら、美緒が相手をする必要もないだろう。

「美緒ったら」

千秋が隣にすり寄ってきて囁いた。

「そんな嫉妬に燃えるような目でお客様を睨むものじゃないわよ」

「冗談でしょ、わたしはただ」

千秋は秀人を捕まえたまま離さない女性グループに、美緒が嫉妬の眼差しを向けていると本気で思ったらしい。

「隠さなくてもいいわよ。さつきから二人で楽しそうに話してたじゃない。素敵な人だものね、神崎さん。ママの男性を見る目もようやく世間の奥様並みになってくれて嬉し
いわ」

「それはお互いさまでしょう?」

美緒はちらりと千秋の背後に視線をやった。

「脇田さんだってとても素敵だと思っわ。少なくともおば様が過去に連れてきた男性とは全然違うわね」

脇田に聞こえぬように小さな声で囁く。千秋の顔にまんざらでもないような表情が浮かんだのを見て、美緒は心がわきたった。

脇田蓮はもうじき三十二歳になるといった。千秋より五歳年上になる。

彼が大学一年の時に、当時高校一年生だった秀人の家庭教師を引き受けたことがきっかけで、秀人と親しくなった。秀人の高校卒業と同時に家庭教師は終えたが、二人の付き合いは今日に至るまで続いている……、そんなふうの説明してくれた。

髪をオールバックになでつけて、物静かで知的な風貌をしてはいるが、会話が途切れた時の彼の横顔は、まるでトランジットで空港に降り立った、旅の途中の東欧人のようにも見えた。

この場にあつた服に身を包んでいても、なんとなく周りに溶け込んでいないような、近寄りがたい雰囲気を漂わせている。そして秀人とは対照的に、社交が苦手なようだ。もっぱら千秋の聞き役に徹している。

「お待たせ」

物思いは秀人の声で中断され、いきなり目の前にシャンパングラスを差し出される。

千秋がどこかのご婦人と話し始めた途端、入れ替わるように神崎秀人が現れたのだ。

「ありがとうございます」

ボーイを捕まえればすぐ済むことなのに、どれだけ油を売ってきたのやら……

グラスを受け取りながらつい、そんな思いが浮かんでしまう。それを秀人は敏感に察知した。

「もしかしてさっきの太ったって話、まだ怒ってるのか」

「いえ、別に……」

「悪いな、思ったことをつい口にしまっう性格なもので。……でもそんなに気にするほどのことじゃないだろう?」

「気にするかどうかは、わたしが決めることだと思いますが」

機嫌を取らなくてはと思いつつも、相手の口調がいつそう馴れ馴れしくなったのが不快で、美緒はそっぽを向いた。すかさず秀人が正面に回り込む。

「元人気モデルの中島美緒さん、雑誌で見なくなっただけでいぶん経つけど、相変わらずお綺麗ねって……。さつきからそればかり言われてただけだな」

「わたしのことを話題にしてたんですか?」

「まあ、だいたい。皆さん、君の近況に興味があるそうだよ」

「神崎さん……」

「俺も聞いてみたいと思っただけだ。どうしてモデルを辞めたの？」

ピアノの生演奏が、軽やかなメヌエットからスローなワルツに変わる。秀人は相手の目をじっと見つめて話すのが好きらしい。美緒が目をそらしても、優雅なターンをするように、美緒の前に立ちふさがる。

「モデルの仕事はアルバイトでやっていただけです」

「なるほど、よくあるパターンだな。休日の街でスカウトされて、アルバイトのつもりでやってみない？ ……と、熱心に誘われる。だけどスカウトされたみんなが、人気モデルになれるわけじゃない。せっかく築いたモデルのキャリアを捨てるのは、惜しくなかった？」

「いいえ、ちつとも。それより神崎さん」

「何でしょう」

「モデルの女性にご興味がおありなのでしたら、わたしではお役に立てそうもありません」

律子が見ているのを感じたが、構わず美緒はびしりと言ってやった。ホテルマンが皆、ゲストの言いなりになると思っただけ大間違いだ。

秀人は目を丸くして黙り込んだが、すぐにその顔に甘い微笑みが浮かぶ。

「いいや。モデルはどうでもいい」

へこむどころか、彼はいつそう魅惑的な笑みを浮かべる。美緒は呼吸が苦しくなるのを感じた。

「俺は君自身に興味がある。中島美緒さん、モデルとしてのキャリアを捨ててまで、君が掴みたかったものとは？」

「それは……」

「ホテルウーマンになること？ それとも陰山グループの一員になることかな？」

「どっちでも……」

ないわと言いかけて声を失う。わたしの夢は父が手がけたホテルで働くこと——ではあるが、会ったばかりのこの男に、そんなことまで教える義務はないはずだ。たとえ接待を言いつかつたといっても。

「どっちでもないのか？ じゃあ、他にあるんですね。君の夢は」

「スポーツ事業部はお忙しいですか？ フィットネスクラブとかテニススクールとか、神崎のスポーツ施設は日本中にたくさんありますものね……」

愛想笑いを浮かべて、美緒は強引に話題を変えた。スポーツ事業部に在籍するという彼は、各地のスポーツクラブやスクールの運営をみることもつばらの仕事だと、さつき聞かされた。去年までは御茶ノ水にある本社勤務だったそうだが、今年になってから

銀座のショールームの上のオフィスに職場が変わったという。

「まあ、それなりにね」

何が楽しくて、笑っているのか、彼は。

「俺のオフィスは、君がいるシンフォニアからそう遠くないですよ。スポーツ用品の展示はもちろん、エステサロンとマシニングがあります。仕事帰りに寄っていたら、いつでもご案内しますよ、美緒さん」

「いえ、わたしは」

この男のペースにはまっている。

彼に反発しながらも、不思議な緊張感と心地よさを感じて、美緒はまたしても心を乱し始めた。

「まったく、秀人の奴……。調子に乗って」

脇田が呆れたように呟いた。

周囲のざわめきも視線もまったく意に介さずといったふうには、じっと見つめ合う美緒と秀人。

時々グラスを持った男が、美緒に声をかけようとしてそばをうろつくのだが、秀人の見事なまでのディフェンスで、誰ひとり美緒に近づけない。

千秋は少し離れたテーブルから、そんな二人をドキドキしながら見守っていた。

秀人が人目を引くのは言うまでもないが、美緒の美しさも際立っていた。黒のドレスは決して露出度が高いわけではないが、美緒の持つしなやかな美しさを十分、引き出してくれている。

秀人と並ぶとひときわ目立つ。今日の主役が誰なのか、皆忘れてしまったかのように、ため息混じりに二人を眺めていた。

「絵になる二人ですね。間違いなく秀人は、美緒さんを気に入ったようです」

「美緒も同じです。あんなに怖い顔をしてるけど、秀人さんがそばを離れると、ずっと目で追ってますもの。でも……もしご気分を悪くさせたらごめんさい。母に頼まれたんですか？ 美緒に適当な相手を探すように」

思い切って千秋は尋ねた。さきほど母は、脇田のほうから秀人をこのパーティに連れしてきたと言っていたが、そうではないと感じていた。

「ええ。そうですよ。モデルをしていた美人がいるから、良家のご子息を紹介してほしいと頼まれました」

脇田はあっさり白状した。千秋の口からため息がもれる。

やっぱりそうなのだ。母は兄に慌ただしく嫁を世話し、同時に美緒にも適当な相手を探し出した。すべては二人が永遠に惹かれ合うことのないよう、母が企んだことなのだ。

千秋は隣のテーブルで、招待客に挨拶している彰文を見つめた。兄が密かに美緒を愛していることを千秋は知っていた。誰にも知られぬよう、その想いを隠し続けてきた兄だったが、妹である千秋には、そんな兄の気持ちが痛いほどわかった。

「何か不都合でも？ 親友にあんな男を紹介したことが、お気に召しませんか？」

「いえ、そうじゃないんです」

「秀人は悪い奴ではありませんよ。それは私が保証します」

「脇田さん……」

脇田は、見つめ合って二人の世界に入っている美緒と秀人を眺めた。

「神崎家のご子息に勉強を教えてほしいと頼まれた時は、正直、ためらいました。私とはあまりにも育った環境が違うと思いますので」

「秀人さんのおじい様と、脇田さんのお父様がお知り合いだったと聞いています」

「ええ、私に声がかかったのも、そのせいです。第一印象は資産家のワガママ息子でしたが、実際に話してみるといい意味で真っ直ぐで、正義感の強い男でした。あいつは自分の努力や苦勞を、他人に見せない主義です。だから誤解も受けやすいですが」

「まるで脇田さんにとって、神崎さんは弟さんのようですね」

脇田の目が笑っていた。

口数が少ない男なのかと思ったが、そうでないことは今、実証された。

ありがたいことに難しすぎる経済の話をされるわけでもなく、一族の自慢話を聞かされることもない。彼の母は子供の頃に他界し、父親は公務員の長男に家督を譲って鎌倉に隠居、あとは千秋より二つ年上になる妹がいるのだが、その妹も家を出て自立しているとのことだった。

エリートなのに気さくな彼の人柄に、千秋はひとまず胸をなで下ろしていた。娘として母の企みはショックではあるが、兄は幸せそうだし、美緒が秀人に恋をするのも時間の問題だ。どうか二人がそれぞれの幸せを掴んでくれますように。そう願わずにいられなかった。

説明のつけがたい胸のざわめきと秀人自身から逃れたくて、美緒は化粧室へ駆け込んだ。
だ。

君の夢は何？ ベルガールの仕事はどう？

あれこれ尋ねてくる秀人に心の奥まで見透かされそうさ。

気持ち落ち着けてから大広間へ戻ってみると、白の礼装に身を包んだ彰文と、同じく白のドレスを着た多香子が、脇田と千秋に挨拶をしているところだった。

つつましげに彰文の隣に立つ多香子は、笑顔を絶やさない。脇田とは面識があるのか、夫婦ともに話がはずんでいた。

やがて自分を見つけた彰文がこちらにやってこようとす。次の瞬間、彼の表情が強張った。同時に美緒は、秀人が自分の後ろに寄り添ったことに気づいた。

実際はただ後ろに立っているだけなのだが、今にも腰を抱き寄せられそうで、またしても妙な緊張感に苛まれる。だが、彰文の驚きようはどうしたことか。何故お前がここに……と、まるで秀人を嫌悪するような表情が浮かぶ。

「美緒、来てくれたんだね……。ありがとう、今日もとても綺麗だ」

「お二人とも、おめでとうございます。そしてはじめまして、多香子さん。本日はお招きただいてありがとうございます」

「ありがとうございます。『マシエリ』のモデルだった美緒さんね。お会いできて嬉しいわ」
美緒は二人に祝福の言葉をかけた。彰文は頷くだけで、緊張しているのか、その表情は硬かった。

そして髪に黄色の小花を飾った多香子は、抱えきれないほどの幸せに包まれている幸せな新妻に見えた。

「ご入籍おめでとうございます。またその節はいろいろと、お世話になりました」

艶のある秀人の声が、どこか冷ややかに彰文にかけられる。気のせいだろうか？ だが向かい合った秀人と彰文の間には、華やかなパーティには相応しくない、うすら寒い空気が漂っていた。

3

株式会社神崎スポーツ。

「KANZAKI」のブランド名で世界に知られる、総合スポーツメーカー。プロアマを問わず、世界中のトップアスリートがKANZAKIのウェアや用具を愛用している。

大正時代、現在の東京都墨田区にて運動用品の製造販売業を創業。今は会長職にある神崎忠秀氏の代に、本社を千代田区内に移転。東証と大証の一部上場、資本金は二百億を超える。国内外の主要都市に営業所と支店を展開しているのもちろん、北米、ヨーロッパ、東アジアに現地法人を設立。

前回のオリンピックでメダルを取った日本代表のマラソン選手が、レースで履いていたのが神崎のランニングシューズだった。去年の水泳の世界選手権ですべての種目において、神崎の競泳用水着を着た選手が表彰台にのぼっていた。

KANZAKIブランドのスポーツ用品は、海外でも高い評価を得ている。

国内ではスポーツ用品はもちろん、会員制のフィットネスクラブや、テニス、ゴルフ、スイミングといったスポーツクラブやスクールが、人気を博している。